

- 研修内容 第50回 指導と評価大学講座 主催：図書文化社・日本教育評価研究会
■研修期間 平成20年7月28日(月)～30日(水) 午前9時30分～午後4時30分
■会場 日本教育会館(東京：神田)

■7月28日(月)

- ◇講義1 新教育課程と教育の課題 ……P1
辰野千壽(応用教育研究所所長・元上越教育大学長)
◇講義2 学習指導要領改訂のポイント ……P3
安彦忠彦(早稲田大学教授・中教審委員)
◇講義3 教育評価の基礎・基本の徹底 ……P4
石田恒好(文教大学学園長)
◇講義4 学校経営と保護者とのかかわり方 ……P6
野口克海(大阪教育大学監事)

■7月29日(火)

- ◇講義5 価値と自己の生き方を育てる道徳教育 ……P6
諸富祥彦(明治大学教授)
◇講義6 これからの授業をどうつくるか ―習得・活用・探究― ……P8
小林宏己(早稲田大学教授)
◇講義7 「教えて考えさせる授業」のあり方 ―定着・進化・活用をどう促すか― ……P8
市川伸一(東京大学大学院教授)
◇講義8 日本語は大丈夫か ……P9
北原保雄(筑波大学名誉教授)

■7月30日(水)

- ◇講義9 学習意欲の発達と向上 ……P11
桜井茂男(筑波大学教授)
◇講義10 これからの教師のリーダーシップ ……P12
国分康孝(東京成徳大学副学長)
◇講義11 PISA型学力と評価のあり方 ……P13
北尾倫彦(大阪教育大学名誉教授)

< 目 目 >

◇講義1 新教育課程と教育の課題

辰野千壽(応用教育研究所所長・元上越教育大学長)

I これからの教育

1 確かな学力の形成

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 思考力・判断力・表現力等(活用する力)の育成
 - ・ 動機づけ→獲得→保持→学習効果の転移を考える
 - 「意欲づけ」と「転移(教科を超えて・生活の中で)」
- (3) 学習意欲の向上と学習習慣の確立→家庭で

2 豊かな心の育成

- ・ 道徳教育…まず担任が自分の学級内で→校内へ→家庭や地域へ

3 健やかな体の育成

- ・ 食育の充実がポイント

II 教育の今日的課題

1 学力向上のための方策…教師の指導力と子どもの学習力のマッチング

(1) 基礎学力の重視

- ・ 経験主義, 体験主義の見直し…かつての「はい回る学習」, 系統主義とのバランスが必要
- ・ 総合的な学習の時間の充実…計画的な指導, 教科学習との関連づけ(合科)を。

- (2) 個に応じた指導の重視 → 教師の指導力（授業力）の重視
 - ・ 習熟度別指導，補充的な指導，発展的な指導の適切な活用
 - ・ 教師の役割の見直し（指導と支援のバランス）→教師の指導力が問われる。
- (3) 学習意欲と学び方の重視 → 子どもの学習力の重視
 - ・ 「自ら学び，自ら考え・・・」のおなじみの文言をどうとらえるか。
- (4) 学力調査・統一テストの重視 → 教育的責任の重視
 - ・ 自分の学校は学力がついているのか？・・・結果責任を果たす。
- (5) 教師の地位向上
 - ・ 専門職としてふさわしい待遇を。
 - ・ 社会人登用の問題 → できることとできないこと
- 2 今日の教育の問題点…行動理論を軽視し，認知理論に走りすぎ
 - (1) 個性の誤解
 - ・ 個性には望ましい個性と望ましくない個性がある。
 - ・ 個性は「社会の中で形成される」ことを忘れて，子どもの現在の個性をすべてよいとし，わがままや利己主義を認め，独善的なことや非社会的なことさえ個性のあらわれとして容認する傾向
 - (2) 適応理論の誤解
 - ・ 欲求の充足は善であり，欲求の阻止は悪であると考え，欲求不満を生じさせない過保護なしつけや甘い教育
 - ・ 困難への耐性が不足
 - ・ 楽しい授業のはき違え → 子どもに迎合した授業になっていないか
 - (3) 自発性・自主性の誤解
 - ・ 子どもの自主性・自発性・自由をはき違え，過度に重視する → 教師の指導性の低下
 - ・ 教師の指導を軽視し，学習者中心主義の指導へと傾斜する。
 - (4) 「子どもに学校を合わせる教育」から「学校を子どもに合わせる教育」への行き過ぎ
 - (5) 教育改革の動向
 - ・ 英米仏などでは学力低下が問題となり，個性尊重から画一化の教育へ回帰。
 - ・ ゼロトレランス方式の確立（米国）→97年クリントン大統領：秩序の乱れから「寛容性を認めない」教育へ。日本で言う「教育的配慮」無用論。校則破りは即，罰則
- 3 子どもの学習力
 - (1) 自ら学ぶ力の育成
 - ・ 自己制御学習
学習過程を自分で統制，制御する。学習目標の達成を目指し，目標設定，方略設計，自己監視，自己評価，自己調整などのメタ認知的活動を行う。
 - ・ 自己制御学習のステップ（チーマーマンら 1996）
ステップ1：自己評価と自己監視→学習者が自己のレディネスを理解し，何ができるか判断する。
ステップ2：目標設定と方略設定→具体的学習目標を設定し，それを達成するための方略を立てる。
ステップ3：方略実行と監視→計画した方略を実行し，それを自己監視する。
ステップ4：実行結果の監視→結果が学習結果にどのように影響したか調べる（自己評価）
 - ・ 効果的な学び方
PQ4R法（トーマスとロビンソン1972）／下見をする→設問する→読む→熟考する→復唱する→復習する
- 4 「学び方」の学習・・・どのように身につけさせるか
 - (1) 学び方の学習の意義 確かな学力の向上を目指す。現在及び将来にわたっての学習習慣
 - (2) 学び方の指導 低学年のうちから身につけさせる。
 - ・ 条件付け・・・学習の習慣化，同じ時間に同じ場所で毎日学習する。
 - ・ 模倣（モデリング）・・・よい手本を示す。
 - ・ 知的理解・・・学び方の意義・役割について理解させる。
 - ・ 意図的努力・・・行動的契約法／不適切な行動をした場合の約束を決めておく。ゼロトレランス
- 5 学力調査のあり方
 - (1) 意義と役割
 - ・ 目的・・・教育の改革，改善を図る。
 - ・ 役割・・・個人や学校全体の成績を向上させる／矯正指導が必要な児童を明らかにさせる／資金（学校予算）の配分決定のため
 - ・ 影響・・・（効果）援助を必要とする児童を助ける／指導法の改善に資する／学力向上（問題）結果の最低水準に焦点を合わせる／テスト教科のみ重視／測定しやすい観点重視／テストが目標になる／得点をあげる方策をとる／競争意識を招く
 - (2) 学力調査の問題点

- ・ 結果をどう生かすか……教育課程全体に生かす。
- ・ 妥当性、信頼性の検証……標準化されたテストを。

◇講義 2 学習指導要領改訂のポイント

安彦忠彦（早稲田大学教授，中央教育審議会委員）

1 学習指導要領改訂の背景

- (1) 日本の歴史的変遷の変化：キャッチアップした国の教育＝「思考力」重視
 - ・ 日本が先進国と同様に他国のまねをするよりも、自ら創り出す経験が必要な時代に入ってきた。
- (2) 日本社会の教育力の衰退：社会全体を取り込んだ教育の回復・再生
 - ・ 家庭や地域の教育力がなくなってきたことを危惧し、社会全体の教育力の回復・再生が必要な時代→これは政治家の仕事
- (3) 日本の学校教育の国際比較上の変化：OECD/PISAの学力観と学力低下傾向
 - ・ 2003，2006のOECD/PISAの学力調査で学力の低下傾向が見られた。主要国と同様，その学力観を採用せざるを得ない状況を鑑み，低下傾向に正面から歯止めをかける必要に迫られた。

* 【参考】PISA について

無関心だった国々が重視するようになってきた→日本も無視できなくなってきた。

〈最終答申P9に見られる記述より〉経済協力開発機構(OECD)は、1997年から2003年にかけて、多くの国々の認知科学や評価の専門家、教育関係者などの協力を得て、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を、「**主要能力(キーコンピテンシー)**」*2として定義付け、国際的に比較する調査を開始している。このような動きを受け、各国においては、学校の教育課程の国際的な通用性がこれまで以上に強く意識されるようになってきているが、「生きる力」は、その内容のみならず、社会において子どもたちに必要となる力をまず明確にし、そこから教育の在り方を改善するという考え方において、この**主要能力(キーコンピテンシー)**という考え方を先取りしていたと言ってもよい。

*2 **主要能力(キーコンピテンシー)**は、OECDが2000年から開始したPISA調査の概念的な枠組みとして定義付けられた。PISA調査で測っているのは「単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」であり、具体的には、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自立的に行動する能力、という三つのカテゴリーで構成されている。

* 【余談】フィンランドでは「基礎・基本」の習得に重点移動＝「知識・理解」と「思考・判断」を両輪

日本大使館が現地小中学生に日本に関する作文を募集したところ、審査員も驚くほどの綴りも文法も間違いだらけ。

2 学習指導要領改訂の方向性

第4期中教審答申から、改訂の方向を読み取る。〈この答申からは「個性」という言葉が消えた〉

- (1) 改正教育基本法への依拠と「生きる力」の理念の継承
 - 新教育基本法及び新学校教育法の趣旨にしたがい、しかも現行学習指導要領を継承
 - ・ 義務教育，道徳教育の重視＝「個性教育」よりも「共通教育」を重視
 - しかしながら「教育振興基本計画第3章（2）」には、「個性を尊重し，個々の能力を伸ばし・・・」という記載がある。
 - ・ 「生きる力」の理念の継承…「方法・方策」を改善。学校の特色ある教育課程編成
 - ・ 従来の学校種別から義務教育9年間の目標とした。〈第21条〉
- (2) 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランス重視
 - 基礎的・基本的な知識・技能の習得，その活用，そして両者にに基づく主体的な探究
 - ・ 全国学力・学習状況調査に見る知識・理解と思考力・活用力との高い相関
 - ・ 活用型学習(習得の発展として)を媒介とする最終的な目標(探究学習＝総合的な学習の時間)
 - ・ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
 - 「思考力等」を育成するための時間＝学んだ知識・技能を活用する。
 - ・ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
 - 生活習慣・学習習慣(家庭学習)による意欲の下支え
- (3) 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実
 - 徳育・体育の充実強化
 - ・ 道徳の時間は「要がぬめ」，体育の時間は「増」
 - ・ 社会人活用の強化と「道徳臭く」しない留意が必要
 - 道徳の教材づくり，各教科との役割関係〈「指導計画の作成と内容の取り扱い」の「1.作成にあたっての留意点」を熟読のこと〉

3 新学習指導要領のポイント

* 第4期中教審答申に示された教育内容の「主な改善事項」が学習指導要領にどう具現化されたか。

学力観の規定…30条の2項(3つを規定し，そのために(1)～(7))

- (1) 言語活動の充実

- 国・数・外の時間増、各教科等での言語活動（記録，説明，論述，討論など）の重視，コミュニケーションや感性・情緒の基盤としての言語活動重視
 - ・ 子どもの生活，学習全体の「基盤」として重視＝「人間としての基礎」の一つ
- (2) 理数教育の充実
 - 国際的な通用性，内容の系統性，小中の円滑な接続を踏まえた内容の充実，実生活に結びついた学習（科学リテラシー）
 - ・ OECD/PISAの求めるものは実生活に結びついた学習
 - ・ らせん反復学習と論理的表現力
- (3) 伝統や文化に関する教育の充実
 - 国や郷土の伝統や文化の継承と発展，古典・歴史・唱歌や和楽器・日本美術・武道などの充実
 - ・ 国際社会で活躍する日本人の育成
 - ・ 偏狭で未熟な民族主義・国粹主義にならず，他国の伝統文化も尊重する「自己相対化」できる日本人の育成が重要
- (4) 道徳教育の充実
 - 道徳の時間は「要加め」，発達段階に応じた内容や体験活動，友人の生き方・自然・伝統と文化そしてスポーツなどの感動的な教材
 - ・ 社会人との協働を促進
 - ・ 各教科等における道徳教育のあり方，実社会の規範意識の向上を図る必要がある。
- (5) 体験活動の充実
 - 社会性・人間性・知性を育む。
 - ・ 集団宿泊活動や自然体験活動（小学校）職場体験学習（中学校）の重点的推進と活動期間の拡張
 - ・ 子どもの体験活動はまず土曜日を活用，ついで学校内で重点的に強化
- (6) 小学校段階における外国語活動
 - 語学教育ではなく積極的なコミュニケーション活動と言語・文化を通しての国際理解のため。
 - ・ 週1時間では語学教育は無理，国際理解の初歩となるコミュニケーション活動中心
 - ・ 中学校での英語教育への準備としては「英語嫌い」にしないことが大切
- (7) 社会の変化への対応の視点から，教科等を横断して改善すべき事項
 - 教科の改編はない代わりに教科内容の改編を行うべき部分
 - 1) 情報教育…特に携帯について新規に導入，情報論理教育の重視
 - 2) 環境教育…従来以上に「持続発展教育ESD」の観点を重視
 - 3) ものづくり…図工，技術，総合などでいっそう強化する方向
 - 4) キャリア教育…小学校から職業人になることへの理解と楽しみを
 - 5) 食育…肥満，やせすぎ，小児糖尿病など，生活習慣への留意
 - 6) 安全教育…学校・地域・家庭が分担連携するシステムを
 - 7) 心身の成長発達についての正しい理解…エイズ予防への関心を高める。

4 おわりに

- * 「思考力」の育成のため「考えさせる」時間が必要である。時間数増を生かす。
 - 「個人で考え」，「集団で考え合い，論じ合う」という機会の活用とそのための授業時数増の活用
- * 「持続発展教育ESD」の強化が留意すべき唯一の新しい視点
 - 今回の改訂で唯一新しいこと
 - 国連を中心とする環境教育（ユネスコ・スクール）をリードする方向で実践を。
- * 「社会全体による」学校教育の再生・復活を。社会へ向かって呼びかける。
 - 元来は政治家の役目だが，教師が呼び水を与えてその機会を設ける。教育の全体整備を訴える。

◇講義3 教育評価の基礎・基本の徹底

石田恒好（文教大学学園長）

1 教育とは

教育にはすべて目標がある。教育はその目標を実現する営みである。

$P \rightarrow D \rightarrow S$ $P \rightarrow D \rightarrow C \rightarrow A \rightarrow O$

2 教育の目標とは

学習指導要領で示されている。学力は学習によって獲得された能力といわれているが，教育によってその内容・目標実現している状態とも言える。

3 教育評価・教育測定そして評定

(1) 教育測定とは

観察やテストによって事象(状態)を明らかにし，数量的に表す操作…テストの点数と考えるとわかりやすい

(2) 評定とは

観察やテストによって事象(状態)を明らかにし、あらかじめ設定した基準に従って点数や記号等を付与する操作

- ・ 点数や図式、記述などで評定結果を示す。

(3) 教育評価とは

教育による目標の実現状況を明らかにし(測定)、それに基づいて教育(教師の指導、児童の学習、管理職の学習環境の整備や管理運営等)が目標の実現のために機能しているかを値踏み(評価、反省、チェック)をし、不十分であれば機能するように改め、教育をし直し、目標の実現を目指すためのものである。

- * 評価と評定の違いをはっきりと認識することが大切。

〈例〉道徳の評価はしない(誤) / 道徳は評価はするが評定はしない(正)

(4) 教育評価の目的

- ・ 反省と改善

教師：自己の指導について / 児童：自己の学習について / 管理職：学習環境、学級編制などについて / 行政：教育予算やカリキュラムなどについて

- ・ 目標の実現

教師：指導のし直し / 児童：学習のし直し … 目標が実現してこそ終了

(5) 教育評価の手順

- ・ 評価目標(測定目標)の設定…共有する

指導目標から抽出して設定する。

目標を具体化する(目標分析)→その中からもっとも信頼できる測定目標を抽出する。

- ・ 評価資料の収集(教育測定)

測定技術の確立→評価の信頼性

- ・ 資料の解釈

評定(評価)規準…評定(評価)のよりどころ

規準…目標というよりどころ

基準…評定のためのよりどころ 目標基準 / 集団基準 / 個人基準

2 指導と評価の一体化

短期的評価と基礎・基本の徹底

目標→計画1(P1)→実施1(D1)→評定1(S1見とり、チェック、改善)→計画2(P2)→実施2(D2)→評定2(S2実現の確認、成績)

(1) 指導目標の具現化—完全習得学習から—

- ・ 単元を単位として毎時ごとに
- ・ 観点別に

(2) 指導1・計画1(P1)→実施1(D1)

- ・ 多くの児童がわかる、できる計画
- ・ 指導法の工夫…一斉指導や少人数指導(等質・異質)

(3) 評定1(チェックと改善)

- ・ 目標の実現状況を見とり、次の指導についての資料を得る。
- ・ 測定目標(規準)の設定…指導目標から抽出して設定
- ・ 測定技術の選択、作成、実施…測定目標に適した技術がある。
- ・ 資料の作成と解釈…採点等で処理、集計した結果を、評定基準により評定を行う。見とりは3段階以上がよい。
- ・ チェック、改善して次の指導へ。

(4) 指導2・計画2(P2)→実施2(D2)

- ・ 目標の実現状況に応じて、改善した指導・学習のし直しを行い、目標の実現を果たす。
- ・ 少人数指導…習熟度別指導を実施
- ・ 複数の指導者…TTを実施

(5) 評定2

- ・ 目標の実現状況を確認し、成績(評定)の資料とする。
- ・ 測定目標(規準)の設定…評定1に準じて設定
- ・ 測定技術の選択、作成、実施…評定1に準じて行う。
- ・ 資料の作成と解釈、成績の付与…評定1の評定基準で評定を行う。成績に基礎資料としては、評定2は2段階で行うのがよい。

(6) 教育・心理検査の活用

- ・ 長期的評価と学力の向上・評定の保証
- ・ 知能検査、学力検査、適性検査など
- ・ NRTとCRT…学力水準の確認、学力向上対策の検討、評定の妥当性の検討

(7) 情報の整備

- ・ 公開，開示に備え，説明責任を果たせるだけの情報を整備，保管する。
- ・ 指導に関するもの…指導計画や実施報告(週案)
- ・ 評価，評定に関するもの…指導要録補助簿，通知表，指導要録など

◇講義 4 学校経営と保護者とのかかわり方

野口克海（大阪教育大学監事）

1 公立義務教育学校の3つの使命

地域で教育(子どもの地べたで)／公平性を保つ(人権教育)／多様性に応える(すべての児童・家庭)

2 学校経営—3つのマネジメント

(1) カリキュラムマネジメント

- ・ 教育目標(スローガン)
教師の合い言葉，子どもの合い言葉→「やったるで！」から「やったったで！！」
- ・ 静と動の授業…授業のテンポや緩急，間など
「静」：わかる授業→真剣に聞く，静かに考える 「動」：楽しい授業→積極的に発言，発表
- ・ 学級集団づくりは学級開きの日に決まる

(2) 組織マネジメント

- ・ 学校には執行部が必要
- ・ 評価は元気が出るために行う
- ・ 人間が好きだから…保護者対策
「先手必勝」→問題が表面化する前に保護者に対応(説明)。→理解してもらえる。
問題が表面化してからでは(いいわけ)→理解してもらえない。
*学校評議員制度…地域の有力者ばかりではよくない。学校の重点目標に応じて委員を選ぶ。
(例)不登校をなくしたい→そういう人を選ぶ。任期は1～2年

- ・ 教職員全体の経営参画意識

すべての教職員が自分のこととして考える。

(3) リスクマネジメント…「危機」とは「子どもの危機」

- ・ 子どものリスク…子どもを中心に考える(学校の体裁ではなく，子どもを守るため)
- ・ 5つの「子どものリスク」
 - ①子どもと子どもの中で起こる危機…いじめ，恐喝
 - ②子どもと教師の中で起こる危機…体罰，セクハラ
 - ③指導の中で起こる危機…体育時の事故，施設管理不備 90%以上は防げる。
 - ④親と子どもの中で起こる危機…虐待，家出 →チェック体制，予防体制
 - ⑤地域と子どもの中で起こる危機…誘拐，交通事故，不審者

(4) 危機が発生したときの3つのポイント

- ・ 初期対応に全力をつくす→その日のうちにすべてを。適切な対応ができるよう，日頃から有事を想定した訓練を。「うちの学校でも起きる」
- ・ 責任体制を明確に→逃げない
- ・ 隠さない，公開する。
- ・ 危機意識がないのが危機
まさか，うちの学校が・・・

3 余談

野口氏は堺市で0-157事件が発生したとき府教委義務教育課長。堺市教育長辞任の後を受けて事後処理の任を受け，後任教育長に就任する。定年後，園田学園女子大教授・附属中高長となる。この学園はJR西日本福知山線事故現場から2キロのところであり，学生に利用者も多くいる。この時も陣頭指揮をとって，危機管理にあたった。

< 2 日 目 >

◇講義 5 価値と自己の生き方を育てる道徳教育

諸富祥彦（明治大学教授，臨床心理士）

1 「自己の生き方を育てる」とは？

(1) 新学習指導要領での道徳教育

- ・ 「道徳的価値」に基づく「自己の生き方」
道徳的価値→普遍性に基づいた価値
自己の生き方→個を大切にす道徳教育

* 個を大切にすればかりではなく、普遍的価値を基盤とした「個」の形成
個性（わがまま）だけを優先するものではない。常識を身につけた人間づくり

(2) 「自己の生き方」

- ・ 道徳、総合、特別活動、キャリア教育、生徒指導、教育相談をつなぐ1つの「輪」になりうる理論

2 なぜ「自己の生き方」なのか

- 時代の変化の中でとらえると

時代区分	時代性	教育	流行
～S53 \$が200円を切った時代	<ul style="list-style-type: none"> ・まじめ、ガンバリズム ・高度経済成長期 ・豊かさのために手を取り合って進む ・根性と忍耐 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育そのものがやりやすかった ・社会規範を身につける ・徳目だけでよかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・山口百恵 ・巨人の星（思いこんだら試練の道）、あしたのジョー、アタックナンバーワン
S53～H3	<ul style="list-style-type: none"> ・自己実現の時代 ・自分中心の時代 ・豊かな社会の実現 ・自己主張の時代 ・自分を大切に 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己実現の時代、自分を大事に ・おもしろい子が人気者 ・時代に合わなくなった道徳をやっていた ・富士見中の葬式ごっこ ・時代の変化に道徳がついて行けなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・松田聖子 ・言いたいことを言う ・ギャグマンガ ・AKIRA ・ 트렌디드라마
H3～ バブルがはじけた時代	<ul style="list-style-type: none"> ・政治不信、不景気、リストラ ・脱力主義の時代 ・個の確立 ・こつこつタイプが評価されない時代 ・むなしさの時代 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様化する道徳 ・まじめな子が浮いてしまう ・一生懸命ははずかしいこと ・傷つくことを恐れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーズソックス、だぼだぼズボン、ジベタリアン ・間の抜けた言葉遣い ・パフィー、宇多田ひかる、クレヨンしんちゃん ・ドラッグ、セックス、フリーター、ニート（お金のための自己犠牲はイヤ）

- ・ 現在の学校では、それぞれの時代に育った子が保護者になっている。
…山口百恵型、松田聖子型、宇多田ひかる型の母親
- ・ 時代の変化…それに対応する「生きる力」が求められる。
- ・ 近未来に対する理想や希望がない
…ほんとうにしたいこと、なすべきことは何か？
- ・ 生きる理由が見いだせない
…つらくても〇〇があるからがんばれる、〇〇のためにがんばっているんだ。
- ・ 感動の道徳を学期1回は実践してほしい…教師の感動体験をぶつける。
- ・ 道徳の時間だけでなく、総合・特別活動などすべての教育活動を通して。→「道徳教育」
- ・ 幼稚園保育園での自由保育が一因？

3 今、道徳教育に求められるもの

(1) 資料の充実

- ・ 時代にあったものを。アナクロから抜け出す。
- ・ フィクションでは通用しない…高学年では作り話が通じにくい。
- ・ ノンフィクションの資料…TV「道徳ドキュメント」は有効。大人でも感動できる資料を。
- ・ 重要であるが、取り組まれていない→「畏敬の念」

(2) 指導方法の多様化

- ・ 「道徳的価値の自覚」に重点を置いた指導法…昔から変わらない。指導方法の工夫を。
- ・ 「個の確立」「自己の生き方」に重点を置いた指導法…エンカウンター・モラルジレンマ
モラルジレンマ…低い認識の子と高い認識の子を混ぜたグループで話し合いさせる。
- ・ ワークシートの利用…書く量を減らし、考える時間を大切に。「書かせることで安心」はだめ
- ・ モラルスキルトレーニング…授業でやったことを長続きさせる。「心情」はあるが行動できないという例→実践スキルをロールプレイする。できた場合とできなかった場合の両方を。

4 「自己の生き方」の危険

- ・ 個人主義に偏重しないよう。
- ・ 「書く時間」に偏らないよう。
- ・ 「自己の生き方」と「道徳的価値」の自覚…ダイナミックな相互作用

I 新学習指導要領の主旨 ―学習指導に関して―

1 習得・活用・探究の関係

(1) 習得型の教育と探究型の教育

- ・ 対立的あるいは二者択一的にとらえないこと。バランスが大切

(2) 「知識・技能の習得」と「考える力の育成」との関係を明確に

①基礎的・基本的な知識・技能を確実に「習得」させる。

②こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に「活用」する力の育成を。

③この活用する力を基礎として、実際に課題を「探究」する活動を行うことで、自ら学び考える力を高める。

④これらは決して一つの方向に進むのではなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくもの。

*習得と探究は本来相互補完的な関係であり、活用というプロセスの中に内在しあう。

2 総則の改訂

(1) 知識・理解を活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力等の育成

(2) 言語活動の充実

(3) 学習習慣の確立

(4) 伝統や文化の継承・発展、公共の精神の尊重を道徳教育の目標に追加

(5) 食育の推進、安全に関する指導の追加

その他、章立ての中に「第4章外国語活動」「第5章総合的な学習の時間」を新設

*学校経営に反映…言葉だけで終わらぬよう、やればよいで終わらないよう

*各教科の改訂内容もきちんと理解しておく。

II 授業、学習指導の現実が陥りやすい問題点

1 「流行」語を型にはめ、授業をパターン化する。

(1) 「指導はいけない、支援こそが大事」

- ・ 支援と放任が峻別されていない。指導すべきは指導、支援すべきは支援

(2) 「体験・活動を重視しなければならない」→「ねらい」との関係から考えるべき

- ・ 作業主義…とにかく何かやればいいのだろう→何かさせておけばとりあえず安心

- ・ 効率主義…時間がかかってめんどうだ→やりたくない、さっさと済ませよう

- ・ 結果主義…きちんときれいに仕上げなさい→個に応じているか

(3) 「やはり基礎・基本の徹底が必要なのだ」

- ・ スキル、ドリル学習がルーチンワーク(やらせ仕事)に。ストップウォッチ片手の教師

(4) 「これからは教えて考えさせる教育だ」

- ・ 「教える」と「考えさせる」を分断させる誤解。両者は一体のもの

2 子どもの思い、考えが後回しにされる

- ・ 教師の都合が優先されていないか…「教科書をしまいなさい」そこから先の授業をどうつくるか？

- ・ 子ども一人ひとりの経験、意欲、つまづきなどをとらえようとしているか？個を見取る

III 教師が子どもとともにつくる授業

学びが成立するとき、そこでは必ず何かが「活用」されている

1 子どもが問いの前に平等になれる授業→スタートラインがみんな同じ

例：「バスには鏡がいくつありますか？」→教師は答を知っている。

生活経験に根ざす予想…誰もが答えをもてる

2 教師も子どもとともに、問いの前に平等になれる授業→教師も答を知らない。

例：「大仏の開眼式に農民は参加できたのかな？」

杞憂知識に照らして、子どもはもちろん教師も考えこむ。ともに追究する。

*工夫のしどころを教師は押さえておく。指導のねらいから「こういうふうにはさせたい」

◇講義7 「教えて考えさせる授業」のあり方 ―定着・進化・活用をどう促すか―

市川伸一（東京大学大学院教授：中教審臨時委員）

1 「新しい時代の義務教育を創造する」〈2005中教審答申〉…学力低下論を超えて

- ・ 学校力、教師力の強化により、人間力を育成

国による基盤整備(インプット)：学習指導要領→分権改革(プロセス)：人事、学級編制→国による結果検証(アウトカム)：全国的学力調査

2 「習得」と「探究」の学習

(1) 学習の2サイクルモデル

- ・ 習得サイクル→目標とする知識・技能の獲得
 - ・ 探究サイクル→自らの関心に沿った探究活動
- (2) 中教審答申
- ・ 習得型の教育→基礎的な知識・技能の育成
 - ・ 探究型の教育→自ら学び自ら考える力の育成
- 3 基礎学力はどう保証するのか
少ない授業時間の中で、どの子にも基礎学力をつけるには
- (1) 教えて考えさせる授業
- (2) 家庭学習を含めた学習スキルの育成
学習法講座…予習と復習の習慣と方法
- (3) 授業外の学習支援システムの充実
学習相談室の設置 自治体による補充・発展学習機関の設置
- 4 「教えて考えさせる授業」の提案
- (1) 「教えて考えさせる授業」
- ・ 「詰め込み」「教え込み」→旧タイプのわからない授業
 - ・ 「教えずに考えさせる授業」→新タイプのわからない授業
(授業の流れ) 問題提示→自力(共同)解決→確認(まとめ)→ドリルまたは発展
 - ・ 「教えて考えさせる授業」→予備知識の教授により、理解・問題解決・定着を促す。
(授業の流れ) 教師からの説明→理解確認課題→理解深化課題→自己評価活動
- (2) 中教審答申
「……教えて考えさせる指導を徹底し、基礎的・基本的な知識・技能の習得をはかることが重要なことは言うまでもない」→教材・教具の工夫、理解度の把握
- 5 「教えずに考えさせる授業」の問題点
- (1) 問題解決学習を目指しているのに、問題解決学習にならない。
- ・ 先取り学習をしている子、すぐに答えがわかった子にとって、非常に退屈
 - ・ 学力の低い子は自力解決できず、討論にもついていけない。
- (2) 基本的事項すら理解できない子どもを大量に生み出す。
- ・ 教師がていねいに説明する時間がなくなる。
- 6 「教えて考えさせる授業」への誤解
- (1) 問題解決学習を否定するのか
- (2) 「教える」が習得で、「考えさせる」が探究なのか
- (3) 教えて考えさせれば、この授業になるのか
- *重要なポイント
- ・ 「教えて考えさせる授業」は習得サイクルの授業の基本→教えた後には理解確認課題をていねいに →説明活動、教え合い、小テストなど → 教えた後の理解度チェック
 - ・ 問題解決や討論は基礎知識を共有してから
 - ・ 授業後に内省、質問を促す工夫
 - ・ やがて最初の「教える」の部分を予習活動に移行させる。
- 7 「教えて考えさせる授業」がうまくいかないとき
- (1) 「教える」ところで十分教えない
- ・ 「教える」ことへのためらい／「教える」工夫や技術の不足
 - ・ ていねいにわかりやすく教える工夫とは→対話的な説明、教材や教具の工夫、参加的態度
- (2) 「考えさせる」課題に魅力がない
- ・ 迷いや多様なアイデアを誘発しない単調な課題
 - ・ 既有知識からの距離が近すぎる、または遠すぎる課題
- (3) 理解度のモニターが不十分
- ・ 診断的質問、説明的活動、教え合い活動で反応をモニター
- 8 「教えて考えさせる授業」を評価する視点
- (1) 基礎的知識・技能の「定着」
- (2) 理解の深化／応用・発展のレベル
- (3) 学ぶ意欲／興味・関心の高まり

◇講義 8 日本語は大丈夫か

北原保雄（筑波大学名誉教授）

1 「問題な日本語」の氾濫

「問題な日本語」は私(講演者)の造語(本来は「問題のある日本語」)

北原氏の著書「問題な日本語」「続：問題な日本語」 任天堂DSにもなっている

世論調査…学校教育への期待が高い。

教師…「きちんとした服装」「正しい言葉遣い」→少なくとも「です・ます言葉」

2 日本語ブーム

(1) マスコミの影響

- ・ クイズ番組や書籍

私も(講演者)クイズ番組に出演したり、著書「問題な日本語」がある。

(2) 日本語に興味と関心を持つ人が多い。→このこと自体はよいこと。

3 日本語の「乱れ」の原因

(1) 若者の変な言葉の流行

- ・ 言葉をつくって遊んでいる。

(2) 一般の人への広がり

- ・ テレビの影響が大…問題な日本語を氾濫させているのはテレビ

- ・ 朝日新聞の調査

「どんなとき日本語が乱れていると思うか？」

若者や子どもの会話を聞いて/テレビを見て…圧倒的多数

「最大の原因は？」

テレビ…圧倒的多数

4 「問題な日本語」の代表

(1) 朝日新聞の調査より(選択式)

- ・ 「すぐに直してほしいと思う言葉遣いは？」上位5つ

「私ってすごく忘れっぽい人じゃないですか」「千円からお預かりします」「私的にはOKです」

「コーヒーの方をお持ちしました」「ご注文は以上でよろしかったでしょうか」

(2) これらに違和感を持たない人の増加

- ・ 若い人を中心として
- ・ 慣れてしまうという危険性…それが正しいと思われるようになる。

5 KY語

(1) KY語は日本語のローマ字略語

- ・ KY内閣で有名になった。

(2) 新聞の社説にも登場

(3) 具体例

- ・ IT(アイス食べたい)/KD(携帯電話)/GOT(牛丼大盛りつゆだく)/BM(馬鹿丸出し)
DD(誰でも大好き)/JK(女子高校生)/3M(マジでもう無理)

- ・ これがすべてわかる人…普通ではない

(4) なぜ流行るか

- ・ 遠回しに表現できる/周囲から際立たせる(自己アピール)/仲間意識を高める/言葉遊びを楽しむ/ローマ字で日本語を打つ時代(PCの影響)/略語氾濫の時代/携帯メールやインターネット/話し相手や機会の減少(コミュニケーション, 狭い人間関係)

(5) KY語とのつきあい方

- ・ 文節末や文末が表記されない…遊びのうちはいいが、度が過ぎると日本語がだめになる。
- ・ KYのYは「読める」か「読めない」か?…助詞や助動詞が使われない→文法が消滅

6 気になる新市名…若者ばかりを責められない?!

(1) 平成の大合併

- ・ 仮名の市町村が増えた…ひらがなにする意義があるのか?
さいたま市・かほく市・あわら市・あきるの市・ひたちなか市・つくばみらい市
- ・ 日本の市でないような市名
南アルプス市/南セントレア市(見送り)
- ・ 指す地域が大きすぎる
四国中央市/伊豆の国市/太平洋市(見送り)

7 気になる学部名…熟慮し理由があつてのことだろうが……。

- ・ グローバル・メディア・スタディーズ学部/ホスピタリティ・ツーリズム学部/シティライフ学部/キャリアデザイン学部/ライフデザイン学部

8 今時の子どもの名前

- ・ 漢字の持つ意味を理解せず、音だけで名付ける。→当て字
- ・ 人名用漢字の改正(法制審議会人名用漢字部会)で「糞」「癌」「膿」などの追加案が提示された。…国民の不評で削除 → 当然!
- ・ 同じ人名(例:「稀星」きらら)を受理した(富山市)と再考を促した(立山町)…行政側の差

9 日本語能力検定の動き

- ・ 日本語ブームによって受験者増加…よい動き

10 「〇〇力」の氾濫…わけもなく「力」をつけてしまう風潮も危険ではないか？

- ・ 「鈍感力」…鈍感に「力」はない。力がないから鈍感

11 気になることわざ成句

- ・ 喝（活）を入れる／怒り心頭に達す（発す）／割れ鍋に閉じ（綴じ）蓋／恨み骨髓に達す（徹す）
二の舞を踏む（演じる）／万事窮す（休す）／ご他聞（多分）に漏れず
- ・ この会場に全問正解できる人が何人いるだろうか？

＜3日目＞

◇講義9 学習意欲の発達と向上

桜井茂男（筑波大学教授）

1 「自ら学ぶ意欲」のプロセスモデル

(1) 安心して学べる環境

- ・ 学ぼうとするとき、まず大切なこと
- ・ この課題を解決したい→安心して解決できる環境をつくってやる。
- ・ 小学校で意欲を失わないこと→その後への基盤

(2) 欲求・動機レベル

「動機」→情報の入力＝多くは授業。次の3つが「動機」となる場合が多い。

- ・ 知的好奇心…生まれながらに持っている。
「興味・関心」は「個性」
- ・ 有能さへの欲求(自律性の欲求を含む)
達成したいな、成し遂げたい(コンピテンシー)→人と交わる中で社会的に発達する
- ・ 向社会的欲求
社会のためになることをしたい、人のために何かをしたい→発達した高次の欲求

(3) 学習行動レベル

- ・ 情報収集と蓄積
- ・ 自発学習
- ・ 挑戦行動…持っている以上の力を
- ・ 深い思考…蓄積している情報を活用して考える。丸飲みしないで吟味する。→「否定的見方」
- ・ 独立達成…自力で。できるだけは自分でやってみる。

(4) 認知・感情レベル

欲求にフィードバック、次へのエネルギー

- ・ おもしろさと楽しさ、有能感(自律感を含む)、充実感
- ・ 低学年…万能感を持っている。失敗や部分的な成功でも、まだやっつけける。
自分で決めて「～したい」という感情。成功は最高位の自信につながる。
いわれてやったのではなく、自分ですべてコントロール

(5) 自ら学ぶ意欲のプロセス

欲求・動機 → **学習行動** → **認知・感情** → **欲求・動機**

すべてのプロセスにおいて、「安心して学べる環境」づくりが大切

2 児童期における「自ら学ぶ意欲」を育てる→最も大切なのは「授業」

(1) 重要な他者

- ・ まずは親、しだいに教師や友だちに
- ・ 入学したら「安心して学べる環境」づくりを。→学び合える
- ・ 他者から受容されること…教師や友だち
- ・ 家庭…親の受容、勉強できる場作り、学習習慣の確立(低学年のうちに)

(2) 体系的な教育が始まる

- ・ 学校教育…多量の情報(わかる授業：努力すればわかる)
学習活動が盛んになる。→ 欲求が活性化 → 動機の発生

(3) 承認欲求

- ・ 褒めて欲しい、認めて欲しいという欲求が強い。
- ・ 低学年…できたら褒める→自信促進
褒めてくれた人との対人関係がよくなる→「安心して学べる環境」
- ・ 高学年…何でもかんでも褒めない。努力の成果を褒める。

(4) 記憶力が急速に高まる

- ・ 記憶の方略を教える。
- ・ 蓄積→長期記憶→ものを考えるときのデータベース→運用していく力(思考力)

(5) 図書館やインターネットが使用できる

- ・ 自分の力で、自ら学ぶ、確かな情報
 - ・ 幼児期…質問期（何でも親に聞く）…これにより好奇心拡大
- (6) 達成欲求（特に優越欲求）が高まる
- ・ 幼児期は、自分ができれば自分で満足し、それでOK
 - ・ しだいに他人と比較するようになる→人より優れたたい（有能感）という欲求
 - ・ そのための方略…同じ能力の子のグループを作る→グループの中で競わせる。
- (7) 夢を持つようになる
- ・ 長期的な夢を持つようになる…「～になりたい」
 - ・ 学習への意欲づけとなる→それが牽引力となればよい
 - ・ 中学生になれば、しだいに現実味をおびた夢へ変換される。
- (8) 学習習慣を形成する必要がある
- ・ 家庭で、学校で…自分に自信が持てるようになる。
- 3 青年期前期における「自ら学ぶ意欲」を育てる
「自分を見つめ、自分を考えること」そういう場を
- (1) 重要な他者…友だち
- ・ 教師以上に友だちが重要
 - ・ 親との関係をどう保つか
 - ・ 友だちや親、そして教師という他者関係の中で、どう「安心して学べる環境」をつくるか。
- (2) 認識能力が最高段階に達する
- ・ 自分で調べて自分で考え、判断する→高い思考力
 - ・ そのような経験ができる場をつくる。
- (3) 二次性徴によって自分への関心が高まる
- ・ 身体の変化
 - ・ 自己について考えるようになる…悩んで成長していく。
 - ・ 現実的な将来目標を持つ
 - ・ いやなことにも挑戦するようになる…「これは大事なことから」「これはやらねばならない」→やってみておもしろくなる
- (4) 自己評価活動が可能になる
- ・ 幼、低…人に認められないと意欲がわかない。
 - ・ 青年期前期…しだいに自分で自分を褒めたり、叱咤したり
 - ・ メタ認知能力
- (5) 達成欲求（優越欲求と成長欲求）が高い
- ・ 自分が進歩したと認識できる。
 - ・ 自己受容できる…自分を相対的に評価できる。
- (6) 向社会性の意識が高まる
- ・ キャリア教育
 - ・ 人のために役立ちたい、将来医者になりたい → 学習を牽引する。
- (7) 現実的には万能感の高い生徒が多いらしい？
- ・ アンケート「やる気になれば何でもできる」に「はい」と答えた割合 小68%，中70%，高74%
 - ・ 「これはできる、これはできない」が正しく自己判断できない高校生
「自分にはどういう役割ができるのか」がわからない高校生

◇講義10 これからの教師のリーダーシップ

国分康孝（東京成徳大学副学長：日本カウンセリング学会会長：日本教育カウンセラー協会会長）

1 「これから」の意味

個性偏重から集団体験（現実原則体験）へ。他との関係の中で生きている。

世の中は君のものだけのものではない。年長者への接し方、耐性など。

(1) 保護者の要望から推論できるもの

- ・ 例：給食費未納、辞める教師、自殺した教師、謝罪しない親
- ・ 推論される問題点…ナーシズムの肥大化
- ・ 対応→他者の見る目で自分を見る。

(2) 子どもの育ついい集団とは

- ・ 人間関係がよい集団
- ・ 安心して自己開示できる、被受容できる集団
- ・ 明確なルールがある集団

- (3) 結論
- ・ グループ体験から現実原則を学ぶ。
 - ・ 現実原則…他者の権利を奪わない限りにおいての自由
 - ・ ルール…心理的に無理がない、文化的に許容範囲内、納得できるリーダーの存在
- 2 グループ根柢の原理
- (1) 自己開示と被受容感
- ・ 教師の自己開示
 - ・ 教師のイラショナルビリーフ（特定のビリーフ）からの解放…「～ねばならない」
 - ・ 教師による適切な介入
- (2) ルール（集団の規範）…ルールがないと慢性の不安が続く。
- ・ 例：私語，遅刻，あいさつ
 - ・ 条件…リーダーの自己主張能力（ルールを守っていくための役割意識）
「私は教師なんだ」というアイデンティティ
 - ・ 意義…メンバーの超自我形成（心の中の錨，刷り込み）／メンバーの安定感（自分は守られている）／グループの凝集性（学習効果を高めるのに必要）
- 3 リーダーの任務
- (1) メンバーが共有するビリーフを提示 → 集団の規範
- (2) メンバーの欲求・期待に応える → 集団の凝集性（みんなが先生のこと好き）
- ・ わかって欲しい／味方になって欲しい／依存や畏敬の対象であって欲しい
- (3) 目標の提示 → 集団の動き
- ・ 目標がなければ，ただのなかよし集団
 - ・ 目標設定は集団の問題発見が前提
 - ・ 目標設定の3条件→有意義／具体的／達成可能
 - ・ リーダーの心意気…プロとしての知識とアイデンティティ
- (4) リーダーの役割意識 → 行動の原動力
- ・ 権限と責任の意識
 - ・ 失愛恐怖からの脱却…こういうことを言ったら嫌われる，まずいかな～，首になるかな～
- (5) リフレーミング能力 → 自己肯定感の育成
- ・ 違う意味づけ，新しい価値観
 - ・ 複数の価値観にふれる
 - ・ リーダーの私的感情の処理
劣等感情の処理／巻き込まれ感情への対応

◇講義11 PISA型学力と評価のあり方

北尾倫彦（大阪教育大学名誉教授）

1 PISA調査のねらい

- (1) 「学習内容の習得状況調査」ではなく「将来の課題に対処する能力のアセスメント」
- ・ 2000年から3年に1回実施→将来を予測するテスト(習熟度調査ではない)
 - ・ PISAのリーディングリテラシー(読解力)は「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力」
 - ・ 注目されるのは→社会の激しい変化を見通した学習内容の習得を目指しているため。
- (2) 知識基盤型社会における鍵となる能力(キー・コンピテンシー)
- ・ 知識
 - ① 道具(言語，情報，テクノロジー等)を相互作用的に活用する能力
 - ② 異質な集団で交流する能力(コミュニケーション能力)
 - ③ 自立的に活動できる能力
 - ・ 領域カテゴリー
 - ① 読解力
 - ② 数学的リテラシー
 - ③ 科学的リテラシー
 - ④ 問題解決能力
 - ・ これらがテストの内容となっている。
- (3) グローバル化による学力の「国際標準」の必要性 → グローバルスタンダードになりつつある。
- ・ 参加国数…2000年：32カ国 2003年：41カ国 2006年：57カ国
 - ・ 順位よりも学力の質的特徴を把握する。
 - ・ 世界各国と比べて未熟な面を知る。

2 言語活動に関するPISA型学力

- (1) 幅広い解釈力を育てる指導と評価
- ・ PISAにおける読解のプロセス
 - ① 情報の取り出し(テキストの情報を正しく取り出す)

- ② 解釈(情報の意味を理解し、推論する)
- ③ 熟考・評価(情報を自分の知識や考え、経験に関連づける)
- ・ 日本は②解釈が苦手
- ・ 読解力の問題とは言いながら、「思考力(読み取って推測して答える)」を試される問題
- ・ 新学習指導要領での対応 → 国語を中心とした各教科における言語力の育成
- ・ 今後の改善点
 - 1) 幅広い情報提供(長い文章、型破りの材料、非連続制テキスト)
 - 2) 書き手の意図や矛盾点、対立点を見抜く力を試す。
- (2) 表現力や批判力を育てる指導と評価
 - ・ PISA調査において、自由記述式問題で白紙回答が多かったという事実
 - ・ その中には③熟考・評価プロセスを試す問題が多い。
 - ・ 新学習指導要領での対応 → 言語活動(発表、討論など)の充実(欧米での言語技術教育の参照)
 - ・ 今後の改善点
 - 1) 読み取ったことを自分の知識・考え・経験に関連づけて表現させるテスト問題
 - 2) 情報を吟味・批判し、自分の意見、考えを問うテスト問題
 - 3) 自由記述式テスト、論文、レポート、ワークシート、発表、討論の活用と採点基準の厳格化
(採点基準)読み取ったことや事実に基づいた意見や主張/紋切り型や拾い読みではなく、
自分なりの表現/論旨の明確さ/重点の強調や言い換えによる説得力のある表現/多角的な見方や批判力 など
 - ・ 評価の基準(採点基準)が指導の目的となる。
- 3 主として問題解決に関するPISA型学力
 - (1) 現実の領域横断的解決能力を育てる指導と評価
 - ・ PISAの問題解決能力
問題解決の道筋が、瞬時には明らかでなく、応用可能と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学または読解のうちの単一の領域だけには存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて問題に対処し、解決することができる能力
 - ・ PISA調査で結果がよくなかった事例
 - ①「図書館の問題」…貸し出しのルールをフローチャート図にする。→システム解析・設計
 - ②「用水路の問題」…水が流れなくなった。どこをどうチェックするか。→トラブル解決
 - ・ いずれも論理的思考力を試す問題。知識よりも認知プロセス
 - ・ 新学習指導要領での対応 → 総合的な学習の時間の再検討
 - (2) 現実的問題を視野に入れた化学知・学問知を育てる指導と評価
 - ・ PISAの科学的リテラシーをみる問題でよくなかった事例
 - ①「クローニングの問題」…羊のクローンに関する非常に長い文を読み、「小さな切片とは何か」という問いに答える。長文の隅から隅まで読まないとは回答できない。
 - ②「温室効果の問題」…数多くのグラフや表、文を読み取り、「二酸化炭素が原因であることを確かめる前にやっておくべきことは何か」という問いに答える。批判的な考えを問う。
 - ・ 対策
 - 1) 活用を視野に入れた問題提起と発問
 - 2) 核概念や考え方の深化を促し、深化度を厳しく評価する。
 - 3) 科学・学問の探究を促し、探究の深さと広がりを経験する。
 - ・ 新学習指導要領での対応 → 習得型と探究型をつなぐ活用型の授業
科学知・学問知の深化と現実問題の視野拡大
- 4 達成状況に応じた指導と評価 …「求同」と「求異」
 - (1) 学力低位層には基礎・基本の徹底と厳しい評価
 - ・ PISA調査における学力低位層の多さ…フィンランド4～6%・日本12～18%
 - ・ 基礎基本の達成状況を厳しく評価し、未達成者の補充課題学習 → 「求同」
 - ・ 求同…画一的に集団目標準拠評価。全員が同じ目標に向かって。
 - (2) 学力中位層には基本の深化をはかる指導と深まりの厳しい評価
 - ・ 深化度の指標…学問的文脈の把握と知識の関連づけ/現実文脈の把握と活用力/他者への説明力
 - ・ 「思考力」「判断力」を厳しく評価し、その後、深化課題学習
 - (3) 学力上位層には発展的な学力の形成と評価
 - ・ 基礎基本の延長線上に位置づけた発展的な学力の形成と評価
 - ・ 個別化された目標…思考・判断・科学的思考力
 - ・ 発展的な学力の評価…集団目標準拠評価ではなく、個人目標準拠評価 → 「求異」
目標の事前設定ではなく、事中・事後の設定/質的に卓越性に注目した横断的個人内評価

以上